

00521/00521 CXP03307 三谷 真 塾長原稿
(1) 98/11/06 17:46

神戸復興塾縁起・続

神戸復興塾が発足してから間もなく2年になる。震災を契機に被災地で活動を始めたボランティアグループのなかで、われわれは行動より考えるほうが得手という特異な存在としてスタートした。これは必ずしもわがメンバーが口舌の徒だということの意味しない。われわれ一人ひとりそれぞれ被災地に根をおろして活動してきたが、経験や情報の交流を求めて復興塾に集まってきたのが成り立ちであった。したがって、今振り返ってみて初期の活動が現場を歩く公開講座であったのは偶然に負うところが多かったとはいえ誠に適切であったと評してよかろう。公開講座に参加した学生以上に、われわれメンバーが講義や地元の住民との討論を通じて啓発され新しい課題を見出したのである。

しかし、時間の経過とともにわれわれの考え方も活動の方向も少しずつ変わってきた。とくに、今年にはいって行動する集団としての色彩が濃厚になった。たとえば公営住宅入居前交流事業やサンフランシスコへのNPO視察団派遣などは、1年前には予定していなかった活動である。復興塾はシンクタンクの機能を放棄したのか。烏合の衆には政策提言など荷が重すぎるのか。こうした疑問が投げられるのも当然であろう。

この指摘は的外れであると思うが、ある1点だけは復興塾の特色を鋭く衝いている。すなわち、1年前には予想もしなかった事業に取り組む組織としての柔軟性である。だが、それが難しいという問題に積極的に挑戦するパイオニア精神、これが元気がなくなったと評される被災地のボランティアグループのなかで、神戸復興塾が活力を保ち続ける秘訣である。

復興塾が発足して3年目の冬を迎える。われわれは再び新しい目標を設定し、塾生の機略と熱意を結集して取り組むことを約束する。

なお、復興塾結成当時の意気込みを確認するために、最初の趣意書を再録しよう。

阪神・淡路大震災直後、未曾有の災害によって神戸は10年前の水準まで落ち込んだという見方が広く流布した。そしてこの遅れを取り戻すために道路・港湾の復旧や全半壊の解体戸数に見合う住宅建設が復興計画の重点施策とされた。

しかし、この見方は盾の一面を見落としている。この大震災によって、神戸は突然10年後の世界に投げ出され、否応なしに高齢化、空洞化、膨大な福祉負担などの課題に直面することになった。今、われわれが取り組んでいる問題は、まさに近い将来わが国の社会が解決を迫られる問題を先取りするものである。こうした観点から、神戸復興塾は被災地で生まれた21世紀の社会を切り開く鍵になるかもしれない新しい動きに注目し、その活動を担う人びとへ惜しみない声援を送るものである。

「復興塾が生まれるまで」

今回の震災では被災者の救援や被災地のまちづくりに多くのボランティアが初めての経験に戸惑いつつ、本業を離れて、しかもその専門性を生かしつつ活動した。そのなかで大学の研究者、医師、建築家、ジャーナリストなどが自発的に結集し、復興のあり方や具体的な支援策を語り合ったのが復興塾の母体である。このようにして生まれた団体は被災地のあちこちで活動しているが、特定の地域や既存の研究組織にとらわれないわれわれの活動は構成メンバーの多彩さと自由闊達な発想が特色であると自負している。

《復興塾の使命》

復興塾を構成しているのは自主的、自発的に参加したメンバーであり、職業や専門に応じてそれぞれの組織に所属しているのはもちろん、震災復興に関連する別のボランティア団体でも活動しているのが普通である。こうした経緯から復興塾の会合や電子会議は自ずから各種団体の活動を横に繋ぐ情報ネットの役割を果たしてきたが、今後も一層この機能の充実強化に努めたい。さらに生活再建やまちづくりの実践の場で生まれた『現場の知』の蓄積と体系化はわれわれがもっとも貢献できる分野であり、大震災が啓示した共生と協働を基調とするサステイナブル・コミュニティの萌芽を大胆に追求することこそ復興塾の使命である。

《復興塾の活動方針》

- ◆復興塾フォーラムの開催 塾内外の講師を招いて新鮮で洞察力に富んだ問題提起をお願いし、参加者による自由な討論を通して相互啓発と交流を図る。
- ◆復興塾公開講座の実施 グループ単位で受講生を受け入れ、まちづくりの現場で講義や演習を開催するほか、ボランティア体験や復興関連施設見学の機会を設ける。